

## 〈論文〉

唐澤富太郎が『教育博物館』において究明した  
人間形成における“もの”と“ころ”の相即の妙

土 井 進

## 要 約

教育学者唐澤富太郎(1911-2004)がライフワーク『教育博物館』(1977)において究明したことは、“もの”には“ころ”があるということであった。人間形成における“もの”と“ころ”すなわち日本人の精神的側面と物質的側面の両者が融合した姿を、“もの”を通して表現したのが『教育博物館』であることについて考察した。

『教育博物館』に関する先行研究は極めて少ない中であって、博物館学の森田喜久男は、唐澤博物館全館の実物を一つ一つ丹念に見渡したうえで、唐澤コレクションは、これを散逸させてはならず、できればこのまとまりをもって後世に伝えていくことが望ましい、と提言した。また、唐澤門下の森川輝紀は、雑然たる実物資料の山の中から「実証性」を見出した唐澤の直観力と史眼を高く評価した。

淑徳大学の学芸員資格課程に学ぶ学生が、“もの”と“ころ”の相即の妙についてどのような理解を示すかを検証し、学生は若い豊かな感性で、実物と対話し、読み取り、見て取る力を十分に発揮していることが確認できた。

## キーワード

唐澤富太郎 『教育博物館』 “もの”と“ころ” 相即の妙

## I. 研究の目的・方法・先行研究

## 1. 研究の目的

筆者は、学生時代から唐澤富太郎に師事し、毎週土日に『教育博物館』製作の仕事の山に向かって、唐澤と向かい合いながら、終電ギリギリの時間まで研究に没頭した。唐澤が全身全霊を傾けて全国から収集した数万点の教育資料の中から、約7,000点を精選して写真撮影に入った。幼少時に絵筆を懐に入れて歩くほど絵を描くことが好きだった唐澤は、カラー写真を1枚撮るごとに、1枚の絵を仕上げるような気迫で臨んだ。もっと立体感が出るように、色具合がもっと実物のようになるようにと容赦なくカメラマンに注文をつけた。

数万点もの実物資料は、現在の「唐澤博物館」の前身である「教育博物館」の1階から3階まで、足

の踏み場もないほどに収蔵されていた。否、博物館だけでなくご自宅のありとあらゆる部屋にも置かれていた。これほどの実物の山に囲まれていたのでは、あまりに雑然としていて、探したい物がなかなか見つからないのであるが、唐澤の頭の中ではきちんと整理がついていて、さっさと見つけ出してくるのであった。

教育学者唐澤の根本的課題は「日本人の形成」という大きなテーマであった。このテーマは3つの領域、「日本の児童文化」「日本の学校文化」「日本の生活文化」に分けられていた。この3つはまた、家庭教育、学校教育、社会教育に対応しており、唐澤は生涯教育の視座に立って「日本人の形成」を究明する教育学研究を『教育博物館』に込めたのである。

では唐澤は、この膨大な『教育博物館』の研究を通して「日本人の形成」にどのような特質を究明したのであろうか。このことを唐澤の著作物『教育的真実の探究』(1975)と『教育博物館』解説(1977)を通して明らかにすることが、本研究の目的である。

本研究のもう一つの目的は、人間形成における“もの”と“ところ”の考察は、唐澤だけの研究課題ではない。唐澤が『教育博物館』解説の冒頭において「伝統的な思惟、思考、思想を読者自身の目と“ところ”で看取し」<sup>(1)</sup>と述べているように、読者や博物館訪問者が実物を通して“ところ”を看取することを願ってやまなかったのである。果たして現代の若者である淑徳大学の学芸員資格課程に学ぶ学生が、“もの”と“ところ”の相即の妙についてどのような理解をレポートに記述したのか、を検証することが本研究の第2の目的である。

## 2. 研究の方法

『教育博物館』の大著を通して唐澤が究明したことは何であったのか、を明らかにする方法は、やはり『教育博物館』解説に基づくのが最も適しているといわねばならない。本書に書き留められた唐澤の熱い思いを通して、人間形成における“もの”と“ところ”の関係について究明する。学生に対しては、課題探究型学習の進め方を説明した資料と唐澤博物館の所蔵品の名称を記した資料を配布し、レポート作成の参考に供した。

## 3. 唐澤博物館に関する先行研究

### (1) 唐澤の直観力と史眼を高く評価した元埼玉大学教授・森川輝紀

唐澤博物館についての先行研究が極めて少ない中であって、唐澤門下の森川輝紀は「日本教育史研究の系譜」(2016)の論文において、唐澤が重視した実物資料について次のように述べている。

「唐澤教育史学は、概念・思想をそれ自体として語るのではなく、生活する人間、その形成史として、具体的資料(史料・実物)を積み重ねて帰納的に展開することであった。」<sup>(2)</sup>と。実物資料について森川はさらに「忘れられ、捨てられつつある生活文化にかかわる実物資料収集を独力で開始する。各地の民家、古道具屋を廻り、膨大な資料収集を行うことになる。……その成果が『明治百年の児童史』(1969年)・『教育博物館』(1975年)となる。」<sup>(3)</sup>と述べて『教育博物館』に言及している。

森川の炯眼は、唐澤の直観力による教育的価値の発掘とともに唐澤が雑然たる実物資料のなかに実証性を見出した史眼を指摘した点において卓越している。すなわち、森川は「実物への着目は、その彼の直観力によって、新たな史料的、教育的価値を見出されていくことになる。唐澤は「雑然のもたらす実証性」という。生活文化にかかわる実物資料は、凡人の眼には、まさに雑然としている。雑然たる実物資料から「実証性」を見出す史眼とは何なのか。永井道雄が評価した「帰納的方法」に収まらないものをそこに感じるようになる。」<sup>(4)</sup>と述べて、唐澤の直観力と史眼を高く評価した。

表1. 日本教育史の課題探究型学習における唐澤博物館の活用

①「課題探究型学習」の意味と方法

- (1)「課題の設定」：唐澤富太郎著『教育博物館』上中下巻をもとに「仮課題」を設定する。
- (2)「調査」(文献調査)：
- 淑徳大学東京図書館での文献調査。有益な文献に出会ったら、重要な箇所を書き写し、著者名・図書名・頁数・発行年・出版社名を必ず記録しておく。図書は1冊だけでなく複数冊調べて自分の課題に役立つものを採用する。
  - 平成27年11月27日に唐澤博物館で実物調査をし、デジタルカメラで撮影する。
  - 「まとめ・表現」：A4版2頁の「報告書」をパソコンでまとめる。「仮課題」ではなく、実物を見た上で最終的に設定した課題を「報告書」のタイトルとする。「報告書」にはデジタル画像も必ず掲載する。
- 「課題探究型学習」とは、このような一連の探究活動に学生の皆さんが主体的に参加し、内容知と方法知をバランスよく習得するアクティブ・ラーニングのことをいいます。

②『教育博物館』の所蔵品目録 HE MUSEUM OF EDUCATION

上巻「日本の児童文化」―“もの”に見る児童の生活と児童観の歩み―

THE CULTURE OF JAPANESE CHILDREN

—Views on Children and Their Life as Reflected in Actual Things—

中巻「日本の学校文化」―教育の“ところ”と“かたち”―

THE CULTURE OF JAPANESE SCHOOLS —Form and Content of Education—

下巻「日本の生活文化」―“暮らし”の中の“もの”と“ところ”―

THE CULTURE OF JAPANESE LIFE —Thing vs. Hearts in Actual Life—

上巻「日本の児童文化」

お伽噺桃太郎(春宣画 明治時代)、桃太郎粉本、巖谷小波俳画 桃太郎(鬼に泣く子にはやるまい柏餅)、桃太郎(木目込)、桃太郎(陶器製)、日本一桃太郎(芳豊画)、桃太郎と金太郎の相撲合戦、金太郎(北溪画)、牛若丸人形、欄干上牛若丸(木彫)、武蔵坊弁慶と御曹子牛若丸(芳藤画)、鞍馬天狗から免許皆伝をさずかる牛若丸(絵馬)、弁慶と牛若丸(押絵)(以下略)

中巻「日本の学校文化」

八岐のをろち(国定四期国語巻五掛図)、ランタンスライド舌切雀、花咲じい(国定三期国語巻三掛図)、浦島太郎(国定三期国語巻三掛図)、兎と亀(国定三期修身巻一掛図)、さるかに合戦(国定三期国語巻一掛図)、犬ノヨクバリ(国定三期国語巻二掛図)、浅い鉢深い鉢(イソップ物語)(国定三期国語巻一掛図)、桃太郎教材の掛図、桃太郎(国定四期国語巻一掛図)、教科書にあらわれた桃太郎、桃太郎(「尋常小学読本」巻一 文部省 明治20年)、桃太郎(「新修身経典」巻一)普及舎 明治33年、桃太郎(「尋常小学修身経典」巻一 普及舎 明治33年、桃太郎(「国語読本」巻一 明治33年)、モモタロー(「尋常修身教科書」入門巻一 金港堂 明治33年、桃太郎(「尋常小学唱歌」一年 明治33年)、モモタラウ(「エノホン」昭和16年(以下略)

下巻「日本の生活文化」

新板都路入 東海道五十三驛道中雙六(よし藤画 包紙)、江都名物吾妻錦画 東海道細見雙六(北尾重政画)、東海道五拾三次之内 川崎(広重画)、東海道五拾三次之内 三島(広重画)広重の描いた旅姿、東海道五拾三次之内 府中(広重画)、東海道五拾三次之内 赤坂(広重画)、大日本早引細見絵図・道中独案内、大日本早引細見絵図(天保13年 1842年板行 嘉永元年 1848年再板)、道中独案内(文久3年 1863年)(以下略)

(2) 唐澤コレクションを日本人形成史研究の重要資料と評価した森田喜久男

平成28年度淑徳大学学術研究助成「教育学・博物館学からのアプローチによる唐澤博物館成立過程の研究」の研究代表者・森田喜久男は博物館学の視点から、「唐澤博物館の存在意義と可能性」について論述している。それによると私設博物館である唐澤博物館のコレクションは「その収集範囲が、従来の教育博物館のように学校教育に偏重するものではなく、生活教育史を出発点として、さまざまな分野からのアプローチを可能とするものであったことを確認した。唐澤自身の資料収集の方針は、ポピュラーなものを大量に収集した点にある。その結果、地域への浸透変化や時系列変化を追う事が可能となる。唐澤は、明治から大正にかけて存在した教育博物館を目標としながらも、更にその可能性を広げたものと評価できる。唐澤博物館のコレクションは、単なる教育史研究の資料にとどまらず、日本人形成史研究の重要な資料になり得る。」<sup>(5)</sup>と高く評価している。

森田は唐澤博物館の視点が生活教育史を出発点としているため、日用品として廃棄されがちなポピュラーなものを大量に収集した点を評価するとともに、これらのコレクションは日本人形成史研究の重要な資料になり得るものであるから、この貴重なコレクションを散逸させてはならず、できればこのまとまりをもって後世に伝えていくことが望ましい、と提言していることは傾聴に値するものである。

(3) 唐澤富太郎に師事し『教育博物館』の製作過程に参画した土井進

筆者は、学生時代の1969年から唐澤富太郎に師事し、実物資料の収集、『教育博物館』上中下巻の構成、束見本への割り振り、実物資料の写真撮影、実物資料の修理、実物資料の解説文の下書き、教育博物館の掃除等の研究活動に助手として参画し、唐澤から教育者として生きる根幹となる訓えを直伝されてきた。この師恩・学恩の万分の一にも報いたいとの思いから、以下の3本の論文をまとめた。

- ① 土井進(2017)「唐澤富太郎、畢生の大業『教育博物館』の原点—幼少年期の出雲崎での人間形成—」『淑徳大学人文学部研究論集』第2号、pp.1-14
- ② 土井進(2018)「唐澤富太郎の「仏教と教育」を結ぶ「教育の宗教的基礎」の研究—東京文科大学教育学研究科・奈良女子高等師範学校時代の仏教教育研究—」『淑徳大学人文学部研究論集』第3号、pp.1-14
- ③ 土井進(2018)「博物館の実物資料のもつ教育効果—「生涯学習概論」における唐澤博物館との連携—」『茗溪社会教育研究』第9号、pp.2-14、筑波大学生涯学習・社会教育研究室

この3本の論文を通して、『教育博物館』の大著が出来上がった原点に唐澤が幼少期に育んだ絵心があったこと、教育学者としての原点を大乘仏教思想の体験的理解によって形成したこと、そして、学生は唐澤博物館の実物を通してどのような“こころ”を看取することができたか、をレポートの記述を通して検証した。

## Ⅱ. 唐澤富太郎が究明した“もの”と“こころ”の相即の妙

### 1. 自らの天性に最も適したライフワーク『教育博物館』

唐澤は1975(昭和50)年3月、63歳で東京教育大学を定年退官したのを機に、「私の出で立ちの第一作は『教育博物館』三巻の完成ということである。」<sup>(6)</sup>と述べ、その時の心境を「現在の私の全エネルギーを投入してこそはじめてできるものであることを日々肝に銘じているのである。これほど私の情熱をかきたてる研究はもうないような気さえするのである。私は元来視覚型で聴覚型ではない。若い日、画家を志望したのもこうした理由によるのであるが、この『教育博物館』は、私のこの天性に最も適し



た仕事であるという思いが深いのである。それだけ何かわくわくした情熱が湧き上がってきて、湧き出る構想をまとめる楽しさは何ものにもかえがたいものがある。逆にいえば、私の身边にある教育史の資料として集めた“もの”は、それほど私を夢中にさせる魅力を放っているということである。」<sup>(7)</sup>と喜びを満面に表している。

このような何ものにもかえがたい唐澤の楽しさは、一体どこから湧き出てきたのであろうか。その源泉こそは唐澤が30数年間をかけて、文字通り血と汗の結晶によって収集した実物資料そのものであった。それらを修理し、手許に置いて多年温め、鑑賞する生活を送っているうちに、「その“もの”の内面にある日本人の“ところ”が伝わってくる思いがするのである。……今までは何でもないと思っていた物の中に意味を見出し、美を発見し、生活に使った用具の中に、古代からの日本人の心を汲み取り、それを人間形成という私の専門の立場から解明せざるを得ない気持ちにかりたてられたのである。」<sup>(8)</sup>と述懐している。

唐澤は7万点もの実物資料を収集し、それを修理し、実物に対峙して、深く鋭い洞察力をもってその実物から伝わってくる教育的意義と価値を見出す労作業の中で、精神が最も集中し、無我夢中になる至福の時間を過ごした。そして、「資料を多く集めてわかることは、“もの”には“ところ”があるということである。そしてこれらの“もの”こそ日本人を形成する主導勢力であったことを思わずにはいられないのである。私は本書（『教育博物館』）においては、人間形成における“もの”と“ところ”すなわち日本人の精神的側面と物質的側面、この両者の融合した姿を“もの”を通して表現することを最大の課題としたのである。」<sup>(9)</sup>と研究課題を明確にしている。

## 2. “もの”と“ところ”は相即し、一如であると観る仏教的世界観

唐澤は“もの”と“ところ”の相関関係について、次のように考察している。「伝承的な“もの”とその“ところ”とはどのような関係にあるであろうか。そもそもわれわれの生活は“もの”を離れて“ところ”はなく、また“ところ”を離れて“もの”はないと私は考えている。“もの”と“ところ”とは仏教が強調するように“物心一如”であるといわなければならない。道元は『典座教訓』の中において、「物来たりて心に在り、心帰して物にあり一等に侘（他）と精勤弁道す」といって、物心一如の修行の必要であることを述べているのである。……“もの”はわれわれ人間を囲む物的環境として絶えず働きかけ、逆に“ところ”が物的環境に働きかけるという相関関係を保ちつつ発展しているのである。したがって私が特に本書（下巻『日本の生活文化―“くらし”の中の“もの”と“ところ”―』）において留意した点は、残されている“もの”から「思想」を語らせるという態度をとったということである。……すなわち本著作では、われわれの祖先が考え、作り、使用し、残し伝えてきた文化財の“ところ”を尋ねようとしたのである。この残された日本の文化財は、日本人の心のふるさとともいうべき落ち着きと安らぎをもってわれわれに語りかけてくるのを覚えるのである。何故ならば、これらのものは、すべて手作りであり、これを作った人びとの“ところ”が直接にこれらの“もの”の中にこめられているからである。」<sup>(10)</sup>と述べ、

5

## 3. 大乘仏教における物心一如の捉え方

聖徳太子は大乘仏教經典の王とされる『法華経』の注釈書『法華義疏』において、わざわざ「一大乗」と示した。この「一」というのは、二、三……と比較相対される「一」ではなく、「生きとし生ける全ての衆生」全体を乗せて、悟りの道に導くことができる大（勝れた）きな乗り物という意味である。従って、大乘仏教とは全ての衆生を済度することができる経法である、という意味になる。

唐澤富太郎が学位論文の副題に「一特に一乗思想とその伝統に於いて一」と示したのは、中世初期仏教教育思想に共通する「一大乗思想（一乗思想）」こそが、教育の道を切り拓く根源的な哲学であることを究明した所以であろう、と考える。

大乘仏教の特色は、“もの”を3つの側面からとらえる。“もの”の色や形、長さなどの「形」として見える側面を「仮諦」といい、“もの”の性質など目に見えない側面を「空諦」といい、この両者を合わせ持つて、その“もの”を“もの”たらしめている本質の側面を「中諦」と呼び、空・仮・中の3諦は一如していると捉える世界観を有している。

唐澤は「物」をたくさん集めたことによって、“もの”から“ところ”が伝わってきた、と述懐している。例えば、文鎮をたくさん集めた中に、竹の筒の中に重りを入れ「一億一心」と書いたものや、肉弾三勇士を象った鉄の文鎮などがある。それらの色や形で区別される側面は仮諦であり、これらの文鎮を使った人の気持ちや心が伝わってくるのは、空諦であり、色や形は異なり、使った人も異なっているけれども、これらは皆「文鎮」としての本質を有していると捉えるのは中諦である。このように大乘仏教は、“もの”を3側面から観るが、3つは別のものではなく、一つに合体し融合している。

三諦即一諦の原理を、光の3原色赤、青、黄を用いて説明することができるであろう。すなわち、3色を少しずつ重ね合わせていくと、3色が重なったところは無色透明になる。無色透明のいわば「中諦」の中に生活している人間には、仮諦のみが見えるが、空諦は見ることができない。本来、見えない空諦である“ところ”が、たくさんの“もの”を集めるという至難の苦労を重ねたことによって、唐澤富太郎の心眼に“もの”を通して“ところ”が写り出されてきたといえるのではなかろうか。

#### 4. 「物となって考え、物となつて行ふ」西田哲学を実証

唐澤はかつて、西田幾多郎(1870-1945)の高弟、東京教育大学教授・下村寅太郎(1902-1995)の邸宅を訪問したことがあった。その玄関に「人は人 吾は吾なり とにかくに 吾が行く道を 吾は行くなり」という句が掲げられているのに出会った。これは下村の恩師西田幾多郎が詠んだものであった。この句に釘付けになりながら、唐澤は『教育博物館』という前人未到の教育学研究への道を歩み抜く決意をさらに一層堅固なものにした。

西田哲学の究極の思想「物となって考え、物となつて行ふ」が、信濃教育会館講堂に西田の直筆で書かれている。西田はこれがほんとうのことを知る道であり、文字的思考だけでなく“もの”的思考の大切さを説いたのである。

かつて絵かきを志した唐澤は、物事を視覚的に、“もの”的にとらえて絵で表現することが得意であった。小学生時代に書いた達磨の絵には、しょう(生命)が入っている、と言って褒められた。また、頼光の卍絵などの作品も生涯座右から離すことはなかった。唐澤は、人間形成という教育学の研究においても、文字的思考による単なる実証では満足できず、それを越えて人間の精神の奥底にまで迫り、それを絵画的に表現しようとしたのである。唐澤が愛用した「格物窮理・窮理図解」という言葉もこれに通ずるものがある。

『教育博物館』の実物資料の写真を7千枚撮影するのに4年の歳月をかけて、撮影の角度や光の当たり具合などの細部にまで指示を出し、妥協することはなかった。ここに実物資料という“もの”を通して、“もの”自身に人間形成の真実を語らせたい、という唐澤の生活教育史開拓へのやむにやまれぬ願いがあったのである。まさに「物となって考え、物となつて行ふ」という「ほんとうのことを知るという道」を、『教育博物館』において実証したものと考えられる。この大業は、大乘仏教の哲学を縦横無尽に肉化した唐澤にして初めてよく為し遂げることができた仕事であった、と考える。

### Ⅲ. 唐澤富太郎が“もの”から“こころ”を看取した事例

#### 1. 凧についての人間形成的考察

唐澤富太郎の母ゆきの口癖は、「男の子は大きな気持ちを持った人間に成長しなければならない。」<sup>(11)</sup>という一言であった。それには大空を仰ぐ凧揚げが一番よいと言って、母はいつも凧揚げを奨励した。それで唐澤少年は、よその子どもたちがとても買ってもらえない大凧を買ってもらって、浜辺で揚げては思う存分に遊んだ。唐澤の小さな身体にはとても不似合いな大凧が風を受けて強く引っ張るので、風の強い日などは海の中まで体ごと引きずり込まれそうになり、辛うじて満身の力で踏みとどまった、という体験を何度もしている。唐澤は、教育資料探求の旅で全国各地の特色ある凧を目にするとすぐに買い求め、博物館の天井に吊るして楽しんだ。唐澤は凧揚げと人間形成について次のように考察している。「風に吹かれてぐんぐん昇ってゆく凧は、いくら糸を伸ばしても決して天までとどくことはないのであって、このことを通して子どもは宇宙の大きさを身近に感じとるのである。また逆に高く舞い上がった凧の糸をたぐるときには、巻けども巻けどもなかなか降りて来ないものであるが、このことは子どもに、どんな大きなことも途中であきらめないうで、最後まで着々と努力を積み重ねることによってしか成就しないものだということを感じさせるであろう。」<sup>(12)</sup>と。

#### 2. 貝原益軒の書から唐澤が看取した益軒の人物像

唐澤は筆跡から人物像を探究することに強い関心を抱いており、江戸時代の儒者や明治時代の教育者の書や額をたくさん集めて『教育博物館』に掲載している。その中から江戸時代の教育者貝原益軒の書を取り上げ、そこから益軒の人物像をどのように表現しているかを見てみることにしよう。

「この益軒の書は、落ち着いた字であって、気負ったところがなく流暢である。息の長い長命の相が、この書の中にも感じ取られるのである。井上哲次郎は「今試みに益軒の筆蹟を見るに其清高温雅の趣は、蓋し天性に出づるものにして有道の氣象自ら筆墨の間に溢る、豈に世の徒に文字を装飾して、始めて体を成すものと同一視すべけんや」(『日本朱子学派之哲学』p.284)と評している。益軒の人生観は悲観的ではなく、明るく、物事に対して肯定的である。彼は生きとし生けるものを肯定する人であり、市井の人として、庶民を相手に物をいうところがある。こういう意味で平凡ではあるがすばらしい点がある。彼は晩年『大疑録』を書くなど、朱子学から古学への学問の流れの中の分岐点に立っている儒者といえるであろう。」<sup>(13)</sup>

#### 3. 漆の原木から唐澤の心眼に写った日本の伝統文化

石川県輪島市へ風土と人間形成の調査研究に出かけた折のことである。塗師屋の店先においてあった漆の原木に唐澤の眼が止まった。長さ約1m、直径約20cmの漆の大木<sup>(14)</sup>には、10本ほどの漆を掻いた傷跡があった。これを観た唐澤の心眼には、深山に分け入って漆を掻いた職人の“こころ”が察せられ、目の前にある原木と一体となって把握された。使用済みの原木は、もはや焼却される運命にあった。しかし、この実物を日本文化の特色である漆や輪島塗の製作工程を学ぶ教材として活用すれば、日本人の形成という教育学研究の資料となる。すると原木は単なる廃材ではなく、貴重な教育文化財となって蘇るのである。あの重い原木を輪島から担いで帰った唐澤富太郎の心眼を、筆者は到底察することなどできなかった。

唐澤は仮諦の側面からの単なる実証を超えて、仮諦と空諦が中諦のもとに一如している人間形成の実相を究明しようとして、渾身のエネルギーを注ぎ込んでいたのであった。このような物心を一如として

把握しようとする教育学研究は、寂しさと不景気さを堪え忍んで大乘仏教を肉化した唐澤富太郎にして、初めてよく為し得た研究であったといえよう。教育学研究の王道を歩んできた唐澤が、『教育博物館』を通して究明した本当のことを知るといえる道は、“もの”を通して“ところ”を看取するという実物教育にあったと考えられる。

#### IV. 学生が唐澤博物館の“もの”を通して看取した“ところ”

##### 1. 学生が着目した実物資料

学芸員資格課程の必修科目である「生涯学習概論」を受講している学生が、唐澤博物館の実物資料にふれて、どのような“ところ”を看取したのであろうか。これまでの3年間に博物館を訪問した学生数と、一人一人の学生が最も関心を抱いてレポートにまとめた実物名は、表2.の通りである<sup>(15)</sup>。

学生が実物資料から看取した“ところ”を記述していると思われる平成29年度のレポートの一部を、学生の理解を得た上で6編紹介させていただく。

##### (1) 廃棄されてしまう運命の実物資料を後世に遺す使命

「一生を賭けて悔いのない生涯学習の課題として、単なる「読み・書き」だけでは学べない実物資料による学習の重要性、を唐澤富太郎は大事にし、信念としていた。この信念に忠実に生きることが、唐

表2. 学生が着目した実物資料

|         | 平成27年度 (22名)  | 平成28年度 (21名)   | 平成29年度 (31名)   |
|---------|---|--|--|
| 日本の児童文化 | 桃太郎・金太郎・牛若丸<br>男児の遊戯<br>子どもの遊びと遊具<br>双六<br>玩具<br>かるた<br>羽子板と凧あげ   | さるかに合戦<br>独楽<br>国策紙芝居<br>少年倶楽部・少女倶楽部<br>かるたとカルタ<br>面子  | ガラス絵<br>コリントゲーム<br>パズル<br>ブリキ製玩具<br>市松人形<br>戦前の児童向け商品・のらくろ 凧   |
| 日本の学校文化 | 桃太郎の原典と絵本<br>教科書に載っている「さるかに合戦」<br>桃太郎<br>寺子屋の備品<br>明治時代前期の小学校<br>日本の英語学習史<br>寺子屋の書道                                     | 音楽教育の歴史<br>幕末・明治初期の外国語学習と世界認識<br>世界国尽と小学読本<br>教材としての童話<br>寺子屋<br>富国強兵のための国民教育<br>幕末維新期の英語学習と世界認識<br>棍棒体操<br>そろばん<br>祝祭日用菓子木型 | そろばん (3名)<br>近代日本の世界をみる目<br>御真影<br>紙腔琴<br>寺子屋 (2名)<br>天神様 (2名)<br>教育勅語<br>薙刀<br>筆箱<br>墨塗り教科書 (3人)<br>教科書 |
| 日本の生活文化 | 麒麟・龍・鳳凰・鶴と亀<br>江戸時代の女性用具<br>幕末期の風刺画<br>おみくじとうらない<br>絵馬の起源<br>小倉百人一首<br>旅の目的と「バーチャルな旅」と「リアルな旅」<br>江戸時代の菓子づくり<br>医学を支えた道具 | 農耕用具<br>あかり<br>家紋と人びとの誇り<br>龍・狛犬<br>女性用具—和鏡・櫛・簪—<br>東海道<br>日本古地図   | オルゴール時計とランプ<br>女性髪飾り—丈長・元結・簪—<br>盤双六<br>明治時代の時計<br>薬研<br>裁縫道具<br>旅道具                                     |



澤にとって何よりの喜びであったので、廃棄されてしまう運命にあった教育資料を後世に残すため、日本中を捜し歩き、出会った資料を宝として集め、保存するために、この博物館を建設したと考えた。」

この学生は、廃棄されてしまう運命にあった教育資料が、唐澤にとっては宝であったことに着目し、その宝によって実物による学習の大事さを信念としていた、と看取している。

#### (2) ただの道具・玩具の中に日本の大事な文化を発見

「唐澤富太郎が博物館を建設したことについて、一見、ただの昔の道具・玩具にしか見えないものが実は、昔の日本の文化を語るうえで大事なものだ、と唐澤富太郎は把握していた。そして、未来の子どもたちにこれからの日本を担ってもらうため、教育という視点から何か貢献できることはないかと探した結果が、この博物館の建設だと私は考える。」

この学生は、唐澤の心眼には、一見、ただの昔の道具・玩具にしか見えないものが実は、昔の日本の文化を語るうえで大事なものであることを見抜いていたことを看取している。

#### (3) 実物の持ち主やその祖先への敬意の念

「唐澤富太郎にとって、教育や学習というものは、「なくてはならない必要不可欠なもの」ということを良く理解していたからこそ、教育博物館の建設を生涯の課題としたのだと私は思った。教育に関する資料を集め、展示することで後の世代の人びとに教育の大切さ、学ぶことの大切さを知ってもらう目的があったのではないかと私は思う。唐澤は、北海道から沖縄までの各地をまわり、心血を注ぎ、多くの人びとの協力を得て、膨大な量の資料を集めたそうだ。博物館の入り口にある「開館にあたって」に書いてある言葉で「これらの生資料を長年手元に置いて研究していると、私たちの祖先の『知恵』と『こころ』が凝縮されているのを痛感します。」とあることから、唐澤が、これらの実物資料の持ち主やその祖先に対して敬意をもち、研究をしていたことがわかった。」

この学生は唐澤博物館の入り口に唐澤の写真と共に掲示されている「開館にあたって」の言葉に惹かれ、唐澤は教育資料を寄贈してくれた多くの協力者やその祖先に深い感謝の念を抱いていることを看取している。

#### (4) 唐澤の信念、実物教育の重要性

「唐澤富太郎がこの教育博物館を建設したのは「百聞は一見に如かず」ということにまとめられると考える。博物館には7,000点あまりの収集物があり、当時の子どもたちの遊びや学びが一目でわかるようになっている。これは教育を学ぶ学生・教師のために教科書を読むことや、講義を受けるだけではわからないことを実物資料に触れることで、理解してもらう実物教育が重要だということではないだろうか。」

この学生は、実物教育の重要性を深く体験し、教職を志す学生や教員に有益であることを看取している。

#### (5) 「ただのモノ」の中に価値を発見

「唐澤富太郎が教育博物館を建設したのは、歴史的に価値のあるものを「ただのモノ」とせず、次の世代の人たちに伝えることで、貴重な展示物、収蔵物の本当の意味を示すことを使命としたからではないかと感じた。また、教育者としての生涯学習の理念を機軸とし、老若男女、年齢性別に関係なく伝えることで、実物資料でしか伝わらない日本の姿、伝承文化を後世に残していきたい、と強く願ったからではないかと感じた。」

この学生は、歴史的に価値のある実物を「ただのモノ」としない唐澤の眼力は、使命感から来ているのではないかと看取している。

#### (6) 「教育博物館」はなぜ有名でないのか

「最初に外観を見たときは雰囲気のある建物だとは思ったが、ここに本当に教育の歴史を持つものがあるのかは少し疑問だった。しかし、中に入ってみると所狭しと日本の教育や生活に関わるものが飾ら

れており、目を奪われた。大きなものから細かいものまで数多くある展示品を見て、本当にこれを一人で集めたのかと驚いた。唐澤富太郎の教育に対する情熱が伝わってくるようであった。と同時に、なぜここが有名でないのかとても気になった。歴史的に興味深いものもあれば単純に綺麗で目を奪われるものもあった。教育に関わる人だけでなくもっと多くの人に見てほしい博物館である。」

この学生は、唐澤が独力でたくさんの教育資料を収集したことに率直に驚くとともに、唐澤の教育に対する情熱を看取している。そして、なぜ有名でないのかと私設博物館の課題について提起している。

## 2. 平成29年度の学生が見た“もの”と“ところ”

上記の6編のほかに、学生が“もの”と“ところ”について言及したレポートから、その箇所を抜粋して次に掲げる。

- 唐澤富太郎先生は、「あかり」に関するものだけでもたくさん集めており、それ以外にも教育資料を数万点収集された。このことについて私は、唐澤先生が「実物」ということにこだわりを持っていたからだと考える。何かを調べようとする時、本などの他人が調べたものが使われることは多い。しかし、それは型にはまり定説化した知識で、自分自身の考えは生まれない。実物を自分の目で見るということが、そのものを理解する一番の方法なのではないだろうか。唐澤先生が自らの手であれだけの収蔵物を集めたというのは、それだけ実物に対する熱意があったからだと思う。部屋から一步も出ずに写真や文献を見ることが出来るネット社会の現代だからこそ、「実物」という観点が重要になってくると考える。
- 燭台などの凝った加工を見ると、職人は実用性だけでなく見た目にもこだわりをもって作っていたのだと感じられた。このような照明器具は、日本人の妥協しない勤勉さと繊細な技術が合わさってこそ完成したものだと考える。
- 書道には、当然のことながら道具が必要である。「筆」・「水」・「硯」・「文鎮」・「紙」の5つである。書の五友と呼ばれている。書道をするうえで、これらの道具はまさに書道の必需品ともいえる。それ故に、これらの道具に対しての“こだわり”が尋常ではなく、「唐澤博物館」で見た「硯」や「文鎮」は、どれも繊細で綺麗な細工や彫刻が施されているものばかりだった。
- 「硯」・「文鎮」、そして、「筆」は一部分であり、これらの道具だけでこれほどの種類があるのかと驚かされるほどの収集品であった。これらの道具に繊細で綺麗な細工や彫刻が施されているのを見て、私は、これは道具に対しての敬意、そして何よりも「書道」に対する意識の高さが窺える、と思った。私は、実物をじっくりと観ることによって、現代の「書道」の心には、江戸時代の「書道」に対する意識の高さが、少なからず影響を与えているのだと感じた。
- 「物心一如」という言葉は、物を見極める際に心がけた方が良いことだと思った。物は、大切に保存されたら、喜んでいるはずである。唐澤博物館所蔵の物は、生き生きとしていると感じられた。唐澤富太郎先生は、文献だけではなく、物も収集して日本人の形成史を明らかにしようとした。この研究方法は、実物からでしか感じられないことが分かるため、より多くのことが学べる。そのため、深く研究するためには重要なことである。
- 唐澤富太郎先生がこのような多彩な楽器を集めたのは、音楽教育も大事な教育の一つと考えていたからではないかと考え、音楽が好きな者としては、このような楽器・楽譜が大切に保管・展示されていることに大変嬉しさを覚えた。
- それぞれの家紋に誇りを持っていたからこそ、日常生活の中で様々なものに描かれていたのだと考える。これは、家紋意識の薄くなった現在の日本とは全く違うといっているだろう。

- 書物で学んだ時とは異なる、人が使用した、物の温かみを感じ取ることができた。見学者が、実物の資料を活用し、展示物から、以前の教育に触れられるようにと考えて、唐澤富太郎先生は実物の資料収集に励まれたのだ、と私は考えている。
- 唐澤富太郎先生は人間形成という教育の研究を深めるには、文献だけでは不十分で実物も収集して日本人の形式史を明らかにしようとしていたが、私はこのような研究方法について、文献調査をするだけでも研究対象に対する情報を知ることができるが、その情報は他人が研究対象を見て書いていることである。実物が存在するなら実物を自分で見て、実物を見たことでしかわからない情報を知り、自分で感じたことを大事にするべきだと思った。
- このような資料を、唐澤富太郎先生は当時のことを想像し、楽しみながら収集していたのだと思う。そのように思える痕跡が展示の仕方などに見て取ることができ、展示方法で参考にできるものが多いと感じた。

## V. 結論

唐澤富太郎は、東京教育大学教授として日本の教育に対する大きな責任と使命感を担いながら、「日本人の形成」について研究した。世界50数か国の教科書を独力で集めて取り組んだ教科書研究が高く評価され、1962年に西ドイツ（当時）のゴスラーで開催されたユネスコ教科書会議に招かれて講演した。その帰途、欧米16カ国の調査旅行中に西洋文化に圧倒され自信を失いかけていた時、ボストンの美術館で日本美術の優秀性を再発見し、自分に自信を持つことができた。このことがあってから唐澤は、30数年をかけて日本の「あそび・まなび・くらし」に関する実物資料を収集し、十年一剣を磨く執念の作業で『教育博物館』を完成させた。この大業によって唐澤が究明したことは、人間形成において“もの”には“ところ”があるということであった。唐澤は『教育博物館』解説の巻頭言の末尾に、“もの”と“ところ”の探究は、「“もの”を見る私の眼力の進歩発達に」<sup>(16)</sup> かかっており、更に一層精進すると述べている。

淑徳大学人文学部の学芸員資格課程に学ぶ学生たちは、平成27年度から唐澤博物館を訪問し、実物を1つ取り上げ「課題探究型学習」に取り組んでいる。“もの”と“ところ”は相即していると観る唐澤の思想は、学生には理解されにくいと予想していたが、全く杞憂であった。学生は若い豊かな感性で、実物と対話し、読み取り、見て取る力を十分に発揮していることに深い感銘を受けた。

## 注

- (1) 唐澤富太郎(1977)『教育博物館』解説、p.3、ぎょうせい
- (2) 森川輝紀(2016)「日本教育史研究の系譜」『福山市立大学教育学部研究紀要』VOL.4 p.120
- (3) 同上書 p.121
- (4) 同上書 p.121
- (5) 森田喜久男(2018)「唐澤博物館の存在意義と可能性」『淑徳大学人文学部研究論集』第3号、p.29
- (6) 唐澤富太郎(1975)『教育的真実の探究』p.445、ぎょうせい
- (7) 同上書 p.446
- (8) 同上書 p.447
- (9) 唐澤富太郎(1977)『教育博物館』解説、p.5、ぎょうせい
- (10) 同上書 pp.5-6
- (11) 唐澤富太郎(1975)『教育的真実の探究』p.6、ぎょうせい

- (12) 唐澤富太郎(1977)『教育博物館』解説、p.27. ぎょうせい
- (13) 同上書 p.250
- (14) 唐澤富太郎(1977)『教育博物館』下巻、p.190、ぎょうせい
- (15) 土井進(2018)「博物館の実物資料のもつ教育効果—「生涯学習概論」における唐澤博物館との連携—」  
『茗溪社会教育研究』第9号、p.5、筑波大学 生涯学習・社会教育学研究室
- (16) 唐澤富太郎(1977)『教育博物館』解説、p.9、ぎょうせい